メトロポリタン史学会会報

第 14 号（2013.8.29）

発　行　メトロポリタン史学会

第６回歴史探訪

「登戸研究所にみる旧日本陸軍「秘密戦」の実態

―明治大学平和教育登戸研究所資料館見学―」のお知らせ

第 6 回歴史探訪「登戸研究所にみる旧日本陸軍「秘密戦」の実態－明治大学平和教育登戸研究所資料館見学－」を以下のとおり実施しますので，お知らせいたします.

登戸研究所は，秘密兵器・資材を研究・開発するために旧日本陸軍によって開設された研究所です．正式名称は第九陸軍技術研究所ですが，研究内容を秘匿するため登戸研究所と呼ばれていました.

戦後, 登戸研究所の跡地の一部を明治大学が購入し, 現在の生田キャンパスが開設されました. そして 2010 年に登戸研究所の建物を保存・活用して「明治大学平和教育登戸研究所資料館」が設立されました.

今回の歴史探訪ではこの資料館を訪ねて旧日本軍の裏面史の一端に触れ，その歴史的意味を考えてみたいと思います．また明治大学生田キャンパス内にある関連史跡をあわせて見学します．当日の解説・案内を資料館館長の山田朗氏にお願いしました．会員の皆さんのご参加をお待ちしております.

日　　時：１０月６日(日) １３時～１７時
集合場所：小田急線「生田駅」改札口外
集合時間：１３時（食事をすませてきてください）
日　　程：①生田駅改札口外集合（13 時）→徒歩 10 分→②明治大学 生田キャンパス→③明治大学平和教育登戸研究所資料館 見学（解説：山田朗氏）→キャンパス内関連史跡見学→⑤生田駅解散（17 時頃）
講　　師：山田　朗氏（明治大学教授，明治大学平和教育登戸研究所資料館館長）
●参加ご希望の方は，９月３０日（月）までに葉書もしくはメールでお申し込みください．その際，懇親会参加の有無をお書き添え願います.

メトロポリタン史学会第７回秋季シンポジウム報告

2012 年 11 月 17 日（土）に，首都大学東京 南大沢キャンパス 本部棟 1 階・大会議室において，第 7 回秋季シンポジウム「災害と歴史資料―現状と課題を考える―」が開催されました．参加者は 8 名でした．内容は以下の通りです.

奥村　弘氏（神戸大学）
「大震災と地域歴史遺産
―災害に強い豊かな地域歴史文化をめざして―」

本間　宏氏（福島県歴史資料館）
「原子力災害と歴史資料」

コメント：小川雄二郎氏（富士常葉大学）
谷口　央氏（首都大学東京）
山田昌久氏（首都大学東京）

報告は12月刊行予定の『メトロポリタン史学』第9号に特集論文として掲載される予定です．ご期待ください．

メトロポリタン史学会第９回総会・大会報告

2013年4月20日（土），首都大学東京 南大沢キャンパス 本部棟1階・大会議室において第9回総会･大会が開催されました．大会の参加者は40名でした．

まず午前10時30分から小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まり，2012年度活動報告，会計決算，監査結果，2013年度活動方針案，予算案，委員候補者が順次提案され，承認されました．議論では，これまでの会活動を振り返り，若手を中心とした研究活動に力を注いではどうかという意見などが出され，今後の会活動に生かすことが確認されました．

大会シンポジウムでは，「区切って領有するということ―領土問題への歴史学的アプローチ―」というテーマで以下の4氏の報告が行われました．

小谷汪之氏（日本学術会議連携委員）
「問題提起，土地領有権紛争と近代的私的土地所有
―尖閣諸島問題を通して―」
板垣雄三氏（東京大学名誉教授）
「人類史における欧米(・日本)中心主義とその終局過程
―主権/国際法/環境支配[時間および意味空間・資源空間の]/世界分割―」
荒野泰典氏（立教大学名誉教授）
「現在日本の国境問題を境界領域の視座から考える
―近世国際関係論の立場から―」
南塚信吾氏（ＮＰＯ－ＩＦ世界史研究所所長）
「積み重ねられる国境意識
―ヨーロッパの歴史的経験から―」

報告は，今日の領土問題を歴史学的に考えるための問題提起として示唆に富むものであり，全体討論も参加者を含めて活発に行われました．報告は2014年12月刊行予定の『メトロポリタン史学』第10号に特集論文として掲載される予定です．ご期待ください．

メトロポリタン史学会第９回総会議案書（２０１３．４．２０）

［メトロポリタン史学会　２０１２年度活動報告］

2012.4～2013.3

1．会誌『メトロポリタン史学』第 8 号を 2012 年 12 月に刊行し，史学科のある大学を中心に約 80 機関に寄贈した.

2．第 8 回総会・大会（シンポジウム「歴史におけるジェンダー―権力と女性―」）を 2012 年 4 月 21 日（土）に開催した（参加者 35 名）．また，第 9 回総会・大会（2013 年 4 月 20 日，シンポジウム「区切って領有するということ―領土問題への歴史学的アプローチ―」）を準備した.

3．第 7 回秋季シンポジウム「災害と歴史資料―現状と課題を考える―」を 2012 年 11 月 17 日（土）に実施した．参加者 8 名.

4．第 6 回大会シンポジウム「20 世紀の戦争―その世界史的位相―」の報告集を有志舎より 2012 年 7 月に刊行した（発行部数 1,200 部，定価 2,600 円）.

5．第 5 回歴史探訪「江戸城の遺跡を訪ねて」を 2012 年 5 月 20 日（日）に実施した．参加者 18 名.

6．会報 13 号（2012.10.9）を発行した.

7．会員数は現状維持にとどまり，拡大目標（165 名）を達成できなかった.

［メトロポリタン史学会　２０１３年度活動方針案］

2013.4～2014.3

1．会誌『メトロポリタン史学』第 9 号を 2013 年 12 月に刊行する．特集は，第 8 回大会シンポジウム「歴史におけるジェンダー―権力と女性―」と，第 7 回秋季シンポジウム「災害と歴史資料―現状と課題を考える―」の各報告とする.

2．秋に研究交流会，書評会等を開催する.

3．第 6 回歴史探訪を 2013 年 10 月 6 日（日）に実施する.

4．第 10 回総会・大会（2014 年 4 月 19 日）を準備する.

5．165 名を目標に会員拡大に努め，会財政の確立を図る.

6．必要に応じて委員の補充を行う.

［メトロポリタン史学会　２０１３・１４年度委員名簿］

任期：2013.4～2015.3

会　　長：佐々木隆爾
副　会　長：峰岸純夫，増谷英樹，小谷汪之
事　務　局：木村　誠（事務局長），前田弘毅，白川耕一，赤羽目匡由
編　　集：河原　温（責任者），奥村　哲，佐々木真，澤田秀実，月脚達彦，福田千鶴，出穂雅実
企画・研究：中野隆生（責任者），小野　昭，角田三佳，川合　康，橋谷　弘，林田伸一，山岡拓也
監　　事：義江明子，山田昌久

メトロポリタン史学会　２０１２年度決算報告

2012.4～2013.3

[収入]

			2012予算	2012決算
前年度繰越金			151,520	151,520
会費			739,000	428,000
	2005年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	5,000
	2006年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	5,000
	2007年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	5,000
	2008年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	5,000
	2009年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	5,000
	2010年度	(現金)	—	5,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	5,000
	2011年度	(現金)	—	5,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	43,000
	2012年度	(現金)	—	30,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	315,000
雑収入			22,000	2,186
	会誌売り上げ		—	0
	叢書売り上げ		22,000	2,184
	銀行口座利息		—	2
計			912,520	581,706

[支出]

			2012予算	2012決算
会誌制作費			500,000	0
郵便料金			99,600	42,270
	会誌発送		39,600	0
	大会案内・会報等発送		50,000	27,270
	葉書・切手		10,000	15,000
	その他		—	0
事務用品代			20,000	5,500
賃金・旅費			50,000	42,000
雑費			20,000	23,821
	振込手数料		—	0
	弁当・お茶・紙コップ		—	2,021
	懇親会赤字補填		—	21,800
予備費			222,920	0
次年度繰越金			—	468,115
	現金		—	16,940
	銀行		—	13,825
	郵便振替		—	437,350
計			912,520	581,706

※この他に，佐々木隆爾，小谷汪之両氏より各 150,000円 の借入金がある．

●会員数 150名（一般141 名　学生・院生９名）

●会費納入率　12年度・71/150＝47.3％　11年度・111/153＝72.5％　10年度・123/154＝79.9% 09年度・132/154＝85.7%

メトロポリタン史学会　２０１３年度予算

2012.4.1～2013.3.31

[収入]　1,279,115

前年度繰越金					468,115
会費					789,000
	一般会員	5,000	×	120	600,000
	学生・院生	3,000	×	12	36,000
	未収分	5,000	×	30	153,000
		3,000	×	1	
叢書販売		2,200	×	10	22,000
合計					1,279,115

＊予定会員数： 165名（一般 150，学生・院生 15）

[支出]　1,279,115

会誌制作費					1,052,576	*1
通信料金					126,120	
	会誌郵送	180	×	220	39,600	
	８号郵送				26,520	*2
	大会案内・会報等発送				50,000	
	葉書・切手				10,000	
事務用品代					20,000	
賃金・旅費					50,000	
雑費					20,000	*3
予備費					10,419	
計					1,279,115	

*1　前年度未執行分の会誌８号制作費 552,576円を含む
*2　前年度未執行分
*3　前年度未執行分の会誌制作費振込手数料 420円を含む

【シンポジウム参加記】

第 8 回大会シンポジウム「歴史におけるジェンダー―権力と女性―」の参加記が服藤早苗氏から，また第 9 回大会シンポジウム「区切って領有するということ―領土問題への歴史学的アプローチ―」の参加記が栗田禎子氏から寄せられました．お忙しいにもかかわらず原稿をお書きくださった両氏にお礼申し上げます．また服藤氏からは早くに原稿頂いたにもかかわらず，編集の都合で掲載が遅くなりました．この場をお借りしてお詫び申し上げます．

メトロポリタン史学会大会シンポジウムに参加して

服藤早苗

学会設立準備委員会から送られてきた「メトロポリタン史学会（仮称）設立にご協力ください」の日付は，2004 年 9 月 9 日になっている．翌年 2005 年 4 月 23 日土曜日にメトロポリタン史学会創立総会・大会が開かれているが，手帳を見ると歴史学研究会古代史部会の準備報告会の方に出席したようで，残念ながら参加していなかったと思う．「談話会残務処理委員会」から送られてきた翌 2006 年 8 月 1 日付けの「東京都立大学

歴史学研究室談話会解散のお知らせ」も手元に残っているが，文面からさほど実態はうかがえない．談話会を解散して，メトロポリタン史学会を立ち上げるのは大変な議論やご苦労があったのだろうな，とは思いつつ，そのままメトロポリタン史学会に加入した記憶がある．それから 8 年，雑用に追われたこともあり，一度も参加することが出来なかった．ゆえに，2012 年 4 月 21 日に開催されたメトロポリタン史学会第 8 回大会が初めての参加だった．「都立大学」へも久しぶりの訪問だった．

「歴史におけるジェンダー―権力と女性―」のシンポジウムの題名は，学部長の雑用をうまくすり抜けて参加したい魅力的なものだった．しかも，パネラーがジェンダー分析研究の最前線で活躍されている著名な方々と若い新進気鋭の研究者である．これは参加しない手は無い．さらに，峰岸純夫先生をはじめ，お世話になった方々や先輩や仲間に久方ぶりにお会いできると，半分はうきうき気分での参加であった．

参加してびっくり！参加者のあまりの少なさに，である．それに反し，各パネラーの内容は，きわめて濃密で興味深かった．日本近世史でいち早くジェンダー分析にとりくんでいる長野ひろ子氏は，「維新変革とジェンダー―再構築をめぐって―」と題し，春日局や絵島などの江戸時代の政治権力者が明治前期には日本近代国家のジェンダー秩序形成の中で，既婚の春日局は「良妻賢母」「貞女」，未婚の絵島は「性的欲望に満ち人倫にもとる反道徳的逸脱者」とされていく過程を見事に指摘される．福田千鶴氏の「奥向研究の現状と課題」，一番若い高松百香氏の「平安後期の政治文化とジェンダー―女院を中心に―」，西洋史の姫岡とし子氏の「歴史研究とジェンダー―近代ドイツのナショナリズムを例にして―」，どれも刺激的で新しい指摘が盛り込まれていた．それぞれ大変興味深い内容だったが，しかし，各報告は個別実証報告だったり，研究史の流れや本人のジェンダー研究へのアプローチを主軸にしていたりと私の拙い頭には共通軸がすぐには思い浮かばなかった．

何を軸に活発な丁々発止の議論を創り出していくのか，後半の議論が楽しみであった．きっと企画をされた方や司会の方が，本シンポの狙いや方向付けを指摘され，各パネラーのまとめや整理をし，議論の軸を指摘してくれるに違いない，と楽しみだった．ところが，個別議論はあったものの，各パネラーの濃密な内容に比して共通議論はあまり展開できなかったと記憶している．私に関して言えば，十数年前の歴史学研究会委員交替懇親会の三次会での衝撃的なシーンがいつまでも私の脳裏から消えない福田千鶴氏が，「豊臣秀吉は一夫多妻で淀殿は正妻であり側室ではなかった」，と指摘されたことに質問した．すると「宣教師等の史料に妻とある」とのご返答にビックリした記憶が残っている．古代戸籍に「妾」と記載があっても実態は「妻」であり妾概念は歴史的に未成立だ，と詳細に完璧に実証した故関口裕子氏の研究を思い出したからである．平安時代では，妻も妾もツマと訓み，実態は他の史料から総合分析せねばならない．妻と書かれていても実態や研究概念と必ずしも直結しないのは周知の所である．史料批判の必要や有様は，研究対象の時代によって違うのだろうか，と一年たってもはっきりと覚えている．もっとも，参加記を書くように依頼されたのは，懇親会の席上でののりで，しかも覚えていなかったこともあり，あまりメモも残していない曖昧な記憶なので，議論のまとめを楽しみに読みたいと思っている．

せっかく第一線で活躍する著名な研究者をお呼びしたのに，参加人数が少なかったことや活発な議論が展開されなかったことは，大変残念であったように思う．なぜ，参加者が少ないのか．しかも，学生や院生の参加者も受付等の仕事をする人以外にさほどいなかった様に記憶している．懇親会も，報告者や関係者以外はほんの数人しかいなかったのではなかろうか．一年に一度，かつての仲間と会えるその日になれば良いのにな，と初めて参加したのに言える台詞ではないと承知しつつの素直な感想である．でも，こんなに参加者が少なく，かつての先生や仲間に会えないのなら，『メトロポリタン史学』掲載原稿を読めば良いので，無理に参加することはないかな・・・．

シンポジウム「区切って領有するということ―領土問題への歴史学的アプローチ―」参加記

栗田禎子

このシンポジウムは2013年4月20日(土)，メトロポリタン史学会第9回大会の企画として開催されたものである．周知のように，2012年以来，石原都政（当時）による尖閣諸島「購入」計画，そしてこれに押される形で野田政権（当時）がとった尖閣諸島「国有化」措置が契機となって，日本と中国との関係は一気に悪化してしまった．竹島（独島）の帰属問題をめぐり，韓国との関係も緊張している．こうした展開は巨視的に見れば，実は（外交問題というよりは）憲法9条改悪に向けた「改憲状況」を作り出すために推進されてきたもの，国内政治の問題であると考えられるが，にもかかわらず，それが「領土問題」として描かれ，喧伝されていることの意味は無視できない．こうした中で開催された本シンポジウムは，この「領土問題」という問題設定自体を，歴史学の立場から批判的に検証・脱構築しようとするものであった．

プログラムは次の通りである．小谷汪之「領有権と近代的土地所有権―尖閣諸島問題に触発されて―」，板垣雄三「人類史における欧米(・日本)中心主義とその終局過程―主権/国際法/環境支配[時間および意味空間・資源空間の]/世界分割―」，荒野泰典「現在日本の国境問題を境界領域の視座から考える―近世国際関係論の立場から―」，南塚信吾「積み重ねられる国境意識―ヨーロッパの歴史的経験から―」――以下，各報告の内容・趣旨についてごく簡単に紹介しておこう．

小谷報告は，日本政府による尖閣三島「国有化」が土地の「所有権」に関わる問題だったにも関わらず，中国によっては「領有権」の問題として受けとめられたことに着目しつつ，領有権と近代的土地所有権という「別問題だがきわめてよく似ている」二つの問題の違いと連関，照応関係を分析しようとするものであった．領有権の根拠となる国際法上の規定の歴史的背景が検討される過程では，「無主の地」の「先占」といった概念自体の帝国主義的性格が指摘された．また，尖閣諸島の土地に対する所有権の発生，地権者の変遷をめぐる興味深い過程が詳細に紹介され，さらに戦後の米軍による占領体制との関係も分析された．なお，尖閣諸島「国有化」問題を中国の側がどう受けとめているかをめぐっては，奥村哲氏が「補足説明」を行なった．

板垣報告は，「領土問題」を歴史学の立場から考えるなら「ここまで考えなくてはならない」という一連の問題群，必要な射程の広がりを提示しようとするもので，そこでは(1)領土問題を現在の日本社会の歴史認識の「尖端」にある問題として位置づける（根底に存在するのは日本近代史全体の帝国主義の問題），(2)（その日本帝国主義の前提となっている）欧米中心主義の世界秩序を問う，(3)その欧米中心的世界秩序を支える「国家」「主権」「国際法」といった概念自体が実はイスラームに規定される形で成立したものであること（たとえばスコラ学の形成の前提としてのイスラーム）を意識化する，といった手続きを踏んだ上で，今や破綻しつつある欧米(・日本)中心主義を乗り越えて人類史における新たな段階を展望する必要性が論じられた．ヒントとして示されたのは，（たとえば「17世紀世界史における肥前」に着目する過程で浮かび上がってくる）マルチ・エスニックな世界，あるいは農本主義的な「所有」の概念に代わる「トラスト」（＝「お預かりしている」）という発想であった．

荒野報告では，まず「固有の領土」という言説への違和感が述べられた後，近代以降の「国境問題」を相対化するための作業として，近世日本の国際関係が検討された．「国際紛争の回避」が江戸幕府のポリシーであり，これは近代以降の日本が近隣諸国と何度も戦争をするようになったのとは対照的であることが指摘された．「鎖国」「開国」言説が作り出したイメージとは裏腹に，近世日本は「4 つの口」を通じて外に開かれていたことが確認され，またたとえば長崎の出島は東南アジア等に一般的な「シャーバンダル制」の日本版と見ることができるなど，「日本史」をより広い近世的世界秩序の中に位置づけ直していくための見通

しも示された．「領土問題」を解決していくための鍵として「境界領域」の復権，および「政権の主体性」の重要性が指摘された（主体性をめぐっては，「日本人の主体性」「健全なナショナリズム」等の表現が用いられていたが，筆者の理解では要は日米安保への従属から自由になる必要が強調されていたように思う）．

南塚報告は，(1)「国境意識」が近現代においてどのように形成・蓄積・変容していったのかをまずはヨーロッパに即して精緻に検証し，それが世界的に拡散していったことを確認した上で，(2)こうしたヨーロッパ的な考え方からの脱却の可能性を探るものであった．「歴史的領土」といった概念はネイション・ステイト形成の段階で生み出されたものであること，帝国主義期の世界分割の過程で生まれた「勢力圏」概念がヨーロッパに「再帰」したものがファシズム期の「生存圏」概念であること，「冷戦」期の社会主義国家は「一定の領域内において人間社会を意識的に組織」しようとする点では，むしろヨーロッパ的「国境意識」を内在化・強化する存在だったことなどが指摘された．将来への展望としては，人間の幸福や地球環境を視野に入れた場合，今後はネイションを乗り越える「人類」意識が重要であることが強調された．

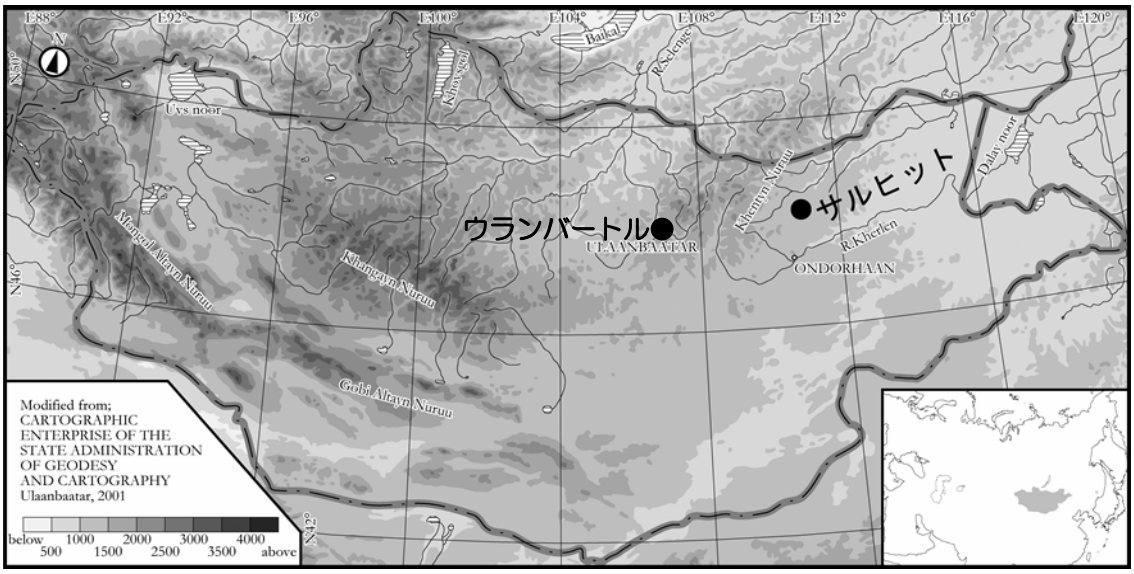
報告後の質疑においては，日米安保の問題，尖閣諸島をめぐる国際法上の議論と「尖閣問題」出現の政治的文脈とを区別して検討する必要性，近世日本を取り巻く国際関係とイスラームの関係，宇宙空間の「領有」の問題，「人類意識」を切り拓いていく主体を誰に期待するのか，といった論点が出された．総じて，欧米(・日本)中心の帝国主義的世界秩序を乗り越えるにはどうすればよいかをめぐり，活発な意見交換，問題意識の共有ができたのではないかと思う．

【歴史随想】

モンゴル・サルヒット野外調査記（その 6）

出穂雅実（首都大学東京，ユーラシア上部旧石器時代）

2009 年 5 月 24 日．ウランバートルを出発して 2 日目の朝は快晴だった．昨晩の嵐の爪痕は草原のどこにも見あたらない．皆，朝の陽光に笑顔だったが，一人，テントを飛ばされたフラビアはやつれた顔をしながら手巻きタバコを吸っていた．



第 1 図　モンゴル・サルヒット人類化石発見地点の位置．ロシア・ザバイカル地方の国境までわずか百数十キロメートルの地点にある．周辺の景観は広大なステップである．

朝食は，小麦粉を溶いたトロトロの塩味の羊スープをカップ一杯と，パンを一片二片頬張った．滋味溢れる優しい味で，おいしい．今回の調査には，調理担当のモンゴル人女性が 1 名同行している．ウランバートルを出発する前に面接を行い複数名の中から選抜された，ウランバートルの小さなレストランで働く調理人だ．面接には私は立ち会っていないが，フランス人研究者たちが立ち会った．面接時の選抜の基準は，面接会場で実際にフレンチフライを作ってもらいフランス人研究者達が一番美味しいと思った調理人，だったらしい．ウランバートルで働いているので，片言の英語を話すことができた．外国人に自分の料理を食べてもらうのがうれしいと言って張り切っていた．朝食が済むとすぐにモンゴル人学生たちが手際よく野営を撤収し，朝 8 時半に出発した．

30 分ほど走ると，谷あいにくみ上げ式の井戸があったので，空のポリタンク数個を満タンにした．みなゼーゼー言いながら車に乗り込み，また旅を続ける．

サルヒット化石発見地点までの，その後の道のりは概ね順調だった．唯一の問題はトラックのスピードが呆れるほど遅いことだった．道は丘陵地帯にさしかかり，アップダウンが多くなったため，たくさんの荷物を積載したトラックのペースは一気に落ちた．トラックは喘ぎ喘ぎ丘を登り，下り道の悪路をほとんど止まるようなスピードで進んだ．私たちが乗ったロシア製のジープは丘も谷もグングン越えたが，トラックを待つために何度も何度も止まって，彼らが追いつくのを待った．

ただ待つのは時間が勿体ないので，遺跡のありそうな場所で止まってもらい，5 分から 10 分の間ではあるが遺跡を探した．道路沿いにメノウ製の石器がたくさん散らばっている新石器時代遺跡を 2 ヶ所発見した．モンゴルでは第三紀に形成された盆地の湖成層で良質なメノウの層が形成される．新石器時代の遺跡はこのようなメノウの産出地に遺されていた．

写真 1（上）井戸から地下水を汲み上げている様子，（中）ウシと共にトラックを待つ様子，（下）サルヒット鉱山．

日中は太陽光が非常に強いので，気温が 15 度程度でも無風であれば暑く感じる．反対に風が強いと猛烈に寒い．

正午過ぎにサルヒットに到着した．快晴だが猛烈な風が吹いていた．立っているのがやっとで，風の吹く方向に真正面に向くとあまりの風の強さに呼吸が苦しかった．砂埃が凄まじかった．

鉱山の敷地外をウロウロしていた銃を持つ警備員に入山の目的を告げ，鉱山長に面会を求めた．モンゴル側カウンターパートのグンチンスレン副所長，調査隊リーダーのブラーガ教授，そして私の 3 人が，コンテナを改造した鉱山事務所本部に入り，鉱山長に挨拶をして，調査の概要を説明した．鉱山長は快く調査を許

可し，重機の提供まで申し出てくれた．

相変わらず，砂金の盗掘集団「ニンジャ」が，夜になると頻繁に出没するらしい．「ニンジャ」はモンゴル民主化後に急増したマンホール・チルドレンや，手っ取り早く現金収入を得るために盗掘に手を染めた牧民からなるという．このような事情で，鉱山事務所から見える範囲に我々のベースキャンプを設営することを鉱山長は指示した．目の届かないところでは危険だと言う．我々は鉱山長に深い感謝を述べ，事務所をあとにした．

ベースキャンプの設営場所の選択は難題だった．一帯はつねに風速 10～30 メートルの強風が吹いている．鉱山事務所から目の届かない山裾の奥まったところや谷あいであれば風の弱い場所があるのだが，目の届く場所はどこでも，谷に沿って山から吹き下ろす風をもろに受けてしまう．まったく正解の無い場所選びで，いくら相談しても結論は出なかったが，結局，モンゴル人達の意見に従って場所を決めた．彼らは風の弱いところが「読める」らしい．

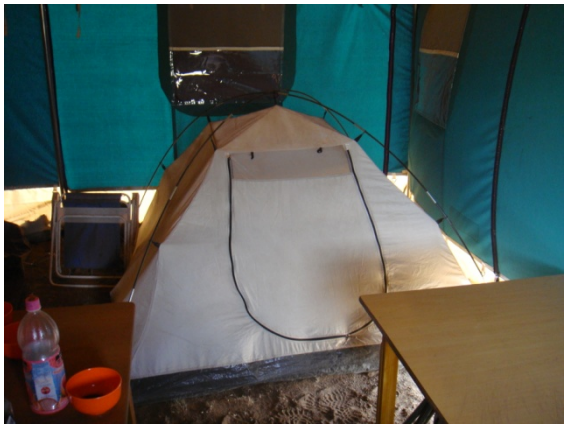


写真 3（上）ようやくベースキャンプ用テント設営完了，（下）ベースキャンプ用テントの中に張った私の個人用テント．

写真 2（上）鉱山長への挨拶，（中）ベースキャンプ設営，（下）強風にあおられてなかなか進まない発掘調査の様子．

通常であればモンゴルのゲル（円形）を使うのだが，モンゴル調査の経験を持たないフランス隊は自国の軍用テント（四角形）を持ち込んだ．四角いテントが風に弱いことをモンゴル人なら誰でも知っている．

それでもやはり風は強かった．風上にトラックを止めて風よけにした．調査本部用の大きめのテントを調査隊全員で設営しようとしたが，2 度吹き飛ばされた．何とか 1 時間ほどで設営が完了したときには全員が疲れ果てていた．

これですべての設営が終わった訳では無い．各自のテントの設営がまだ残っている．調査隊メンバーはベースキャンプから少し離れた思い思いの場所でテントの設営を試みたが，すぐに吹き飛ばされてしまった．結局，モンゴル人達はテントを張らずにトラックの中で雑魚寝することに決め，私たちはベースキャンプのテントの中に個人用テントを設営することに決めた．風が弱くなったら個人用テントは外に張り直そうということにしたのだが，調査が終了するまで 10 日間の間，風が弱まることは無かった．24 時間やむことの無い轟音の中であまりよく眠ることができなかった．ベースキャンプ用のテントが飛ばされる恐怖にいつも苛まれつつ，非常事態に備えて靴を履いたまま毎晩テントに滑り込んだ．

（つづく）

第１回「若手研究者の集い」のお知らせ

メトロポリタン史学会では，これまで年 2 回，春と秋にそれぞれシンポジウムを企画・開催してきました．16 回に及ぶシンポジウムのテーマはどれも興味深いものであり，その成果は会誌『メトロポリタン史学』に特集として掲載され，一部は単行本として刊行されました．

こうした成果を確認しつつ，研究活動の幅を広げるためにも秋の企画を今少し多様なものにしてはどうかという方針が，今春の総会で提案・承認されました．

そこで委員会では，大学院生や PD などの若手研究者が会活動に積極的に参加できるよう「若手研究者の集い」を企画し，下記の通り第１回目の集いを開催することにしました．若手研究者に限らず会員の皆さんが多く参加していただき，この企画が若手研究者の発表と交流の場として定着することを願っております．

日　　時：１１月１６日(土) １３時～１７時
会　　場：首都大学東京 南大沢キャンパス５号館１階１３９教室
研究発表：山﨑文理氏（首都大学東京 大学院 後期博士課程）
　　日置秀太氏（首都大学東京 大学院 前期博士課程）
書　　評：清水光明氏
　　清水有子著『近世日本とルソン―「鎖国」形成史再考―』東京堂出版，2012 年
　　堀川康史氏
　　須田牧子著『中世日朝関係と大内氏』東京大学出版会，2011 年
＊研究発表の題目は追ってお知らせいたします．

【投稿のお願い】

本会では，会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています．広く，歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます．

『メトロポリタン史学』（The Metropolitan Shigaku）投稿規定

(1)　本誌は，年一回 12 月に発行するものとし，原稿の締切は，毎年 8 月末日とする．

(2)　投稿資格は，原則として会員に限る．ただし，編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない．

(3)　投稿言語は，日本語または英語とする．

(4)　投稿原稿は，歴史学・考古学，歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする．

①論文（図表を含み，24,000 字以内；英文の場合は，8,000 語以内）

②研究ノート・史料紹介（同　12,000 字以内；英文の場合は 4,000 語以内）

③学界動向（8,000 字以内；英文の場合は 2,700 語以内）

④時評・提言（4,000 字以内）

⑤書評（4,000～8,000 字）

(5)　論文，研究ノート（縦書き，横書きいずれも可）には，欧文で要旨（300 語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨 800 字以内）．また目次用の英文タイトルを付記する．

(6)　原稿は，編集委員会が採否を決定する．その際，論文，研究ノートについては，編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る．

(7)　著者校正は，初校のみとし，校正時における文章の大幅な変更は認めない．

(8)　注は，末尾にまとめる．

(9)　原稿は原則として，印字された原稿（表，図表を含む）3 部，USB メモリなどの記憶媒体及び別記送り状*（1 部）を提出する．

(10)　掲載の論文，研究ノート・史料紹介，学界動向については，別刷り 50 部を進呈する．

(11)　原稿の送り先，照会については，

〒192-0397 八王子市南大沢１－１　首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系
国際文化コース（歴史・考古学分野），河原 研究室気付
『メトロポリタン史学』編集委員会
Tel: 0426-77-2119（河原研究室）　Fax: 0426-77-2112
E-mail: kawara28@tmu.ac.jp（河原温研究室内）SNC47077@ nifty.com（河原温）

＊ 送り状は学会ホームページ（http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/）からダウンロードしたものをコピーするか，事務局にお問い合わせください．

【事務局からのお願い】

●メトロポリタン史学会会報第 14 号をお届けします．恒例の第６回歴史探訪とあわせ，新たな企画として第１回若手研究者の集いのご案内をいたします．奮ってご参加ください．引き続き会財政健全化のため，年会費を年度内にお支払い下さいますようお願いします．一般 5,000 円，学生・院生 3,000 円です．

メトロポリタン史学会（会長　佐々木隆爾）
〒192-0397
東京都八王子市南大沢１－１
首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内
TEL：0426-77-2110（木村誠研究室）　E-mail：mshigaku@tmu.ac.jp
ホームページ：http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/
郵便振替：00100-0-537287　メトロポリタン史学会